

〔14番 高原邦子 登壇〕

○14番（高原邦子）

発言のお許しを得ましたので、質問させていただきます。今回、私は都竹市長のこの10年間というものについて考えまして、いつもと質問のパターンを変えておりますことをお許しください。

十年一昔と言いますが、都竹市長になり10年の歳月が流れました。いろいろありすぎて思い出せないです。今では人口2万人余の小さな街の市長が中央の組織のメンバーにもなり活躍する姿は、市民の誇りと言っても過言ではないと思います。

3月議会は、令和8年度の当初予算を審議する大切な議会です。参考資料等を拝読しましたが、問題であると思われるところはほとんどチェックされていて、問題点も理解した上での提案書だと理解できました。決してお世辞ではありませんが、よくできてると思いました。しかし、あまりにもプライマリーバランスを気にしすぎていないかと感じました。入るを量りていずるを制すは分かるのですが、いろいろな施策を大胆にやっておけば、財政調整基金とかそういったものを崩して、先ほど昼前の基金とかも崩してでもやっておけば、物価高の昨今もっともって対処できたのではないかと思いました。たればの話をして過去のことをあれこれ言うのは建設的ではありませんが、市民の切実な思いや、数年後にはしなければならぬことを債務負担行為や種類によっては長期継続契約のように1年間というスパンに拘泥せずにやれないかと思いました。

中に書いてあった、マイルドなインフレと表現されておりますけれども、物価高を直に感じている主婦からすると、午前中も主婦とかありましたけれども、主婦の感覚からするとマイルドなインフレってどれくらいを指すのか、そういったことが知りたくなりました。これから先はストロングなインフレになるのかも心配です。インフレならなおさら貨幣価値は下がるわけで、貯金、財政調整基金とか基金をしているより施策を推し進めるほうがいいのではないかと思います。積極財政とまでは言わないけれども、市内の各種業者のためになること、また、困っている市民の要望に積極的に対処するほうがよいのではないかと思う次第であります。

金利がつくようになりましたが、貯金利息も微々たるものに思えます。しかし、施策とかをやれやれと号令をかけても職員不足ではどうすることもできません。本当に歯がゆいばかりであります。そういった点をどのように捉えて、市民にあれこれ説明したらいいのかと思っています。

以前、市長とはゼネラリストとスペシャリストの問題について話をしたことがあります。私は、素直に市民の声、市民の要望はスペシャリストだと言いました。市長は、ゼネラリストの大切さも説かれておられました。でも昨年は職員が少ないといった中での採用のところで、スペシャリストという言葉が使われました。調べますと、ゼネラリストは今や時代遅れとも言われているとか。時代とともに変わっていくものがほとんどかもしれませんが、変わらないものにアイデンティティー、独自の存在があるのではないかと思いました。

今回の衆議院選挙の結果を見て、私自身も問い直しております。あまりにも変わってしまう（以前と違ったことを言う）と独自性が失われ、人々から信用をなくすということがあの選挙で露呈されてしまったのではないかと思いました。都竹市長個人のアイデンティティー、地方公共団体の飛騨市のアイデンティティー、企業にもそれぞれありますけれども、市政を行うに当たってどのようなアイデンティティーを捉えて活動しているのでしょうか。本質とか存在、独自性、そうい

ったことを問うことは大切であります。私自身も自問自答しておりますが、そういったことに基づいての市政ならば市民は安心していけると思うんです。

また、その市政方針の中に、何をやるかよりなぜ必要か、何のためかを徹底して問い直すと記されておりました。具体的なもので一例を挙げますが、市民から「高原さん、イベントとか多すぎないか。行きたいのになぜ同じ日に重ねてやるの。別の日にやってほしいな。」と何人かの市民に言われました。それぞれの部署で計画したり、地域の人からだったりするかもしれませんが、部署間での横のつながりはどうなっているのかなと疑問を抱きました。BバイCを考えてやっていると、費用対効果、やるんだったら効果が高いほうがいいと思いますから、そういったものを考えてやってるのかなと疑問符がつかしました。今回、何のためかを考えていただきたいという思いもありまして、本予算では市税が少しでも投入されているイベントなどには今言ったことが配慮されているのか伺いたいものです。

また、子供たちのことですが、子供たちが「探Q」と称するものに取り組んでいました。私も神岡中学校で一緒に参加したりしましたが、私たちの頃はなかったと記憶しています。問いを立てて深く考えて、いろいろな意見も出ておりましたが、私は、すごい、これって哲学じゃんと思いました。哲学への道と思いました。これからどのように生かしていけるのかも気になりました。一時に終わらせないでほしいけれども、市は探Qをどのようにしていくのかも気になります。市政は多種多様な活動を手がけています。この予算がしっかりと執行されることを願っております。

それで質問ですが、都竹市長のこの10年間を振り返って成し遂げたこととか、いろいろなことがあると思うんですが、前向きな言葉で今までのことを振り返ってどうしたいかというようなことをお聞きしたいと思います。

そしてプライマリーバランスのことですけれど、プライマリーバランスを守ることは健全財政の基本であるということは分かっておりますが、そればかり言っていては、やることが小さくなってしまわないか。市民要望にできるだけ応えてほしいものですから。午前中の籠山議員もそのようなことに触れていたのではないかなと思います。

3つ目に、単年度で予算決算をする市の財政でありますけれども、債務負担行為や長期継続継続契約など方法を考えて、大きな負担になる施策もどんどんやっていったらどうでしょうか。

そして4番目に、予算を増やすと、さっきも言いましたけど、その分職員の負担が増えます。ですから、今回提出された予算は職員の活動というか、そういったものがマックスで捉えられた予算なのか伺いたいと思います。

5番目に、マイルドなインフレとの記述がありましたが、提案された予算はインフレ率のことも考慮してなのか。インフレがこれ以上になったときの方策はどのようなものか、影響はどこまでになるか考えているのかということです。先ほどの籠山議員の中で、市長は諸物価が上がってしまっというようにもおっしゃったと思うんですが、そういったことも含まれての予算なのかということですね。

6番目、アイデンティティーについて思うこととお伺いしたいと思います。時代が変わっても揺るぎないものは何ですか。飛騨市のアイデンティティーはと聞かれたら、どう答えればよいのでしょうか。

7番目、去年は市制20周年ということで数が多かったように思われるイベントですが、今年は

横の連絡を密にしてBパイCに気を遣ったものになりませんか。市民に参加するチャンスを考えてほしいんですが、日程調整は難しいものでしょうか。どのようにイベントの開催を考えていくのかお伺いしたいと思います。

そして8番目に、人間誰しもが一期一会でありますけれども、若いときの経験はその後の人生においてとても重要なものになります。自分で問いを立て深く考えることは、きっと大切なことだと思うんですね。ぜひ発展させていってもらいたいんですが、今後の指導の考え方は探Qについてどのように思われているのかを伺いたいと思います。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔市長 都竹淳也 登壇〕

△市長（都竹淳也）

市政についてたくさん御質問いただきました。最後の探Q以外の7点、私から御答弁申し上げたいと思います。

まず1点目、10年間の振り返りと、あと今後やっていくことというお話でございます。お話いただきましたけども、早いもので10年です。明後日から11年目ということになります。年4回議会をやっていますから、41回目の議会ですね。そうやってやらせていただいております。最初10年前にここで市長になって市政を始めたときですね、就任当初、まず市民の皆様のお願いとか期待とか、多様な声を広く聞きたいというところから始めました。最初は無投票だったものですから、また、準備の期間が短かったってこともあって、そこから始めたわけでありまして、そのときに非常に多くのヒント、いろいろな声をいただいて、それをベースにスタートさせたわけです。その際に思ったことは、特定の分野に偏ることなく全ての分野において政策を全面展開したいということでございまして、市として取り組むべきあらゆる課題に対して果敢に挑戦していきたいということもそのときに考えまして、それをこの10年間貫いてきたというつもりでございます。私の感覚としては、2期目までの8年間で市民生活の基盤づくりと言える広範な取組はおおむね着手し、形ができてきているのではないかなというふうに考えております。

この3期目の2年間、ここまでの2年間で心がけてきたのは、生活に直結する課題だけではなくて飛驒市という町の質や品格、こうしたものを高めていくというような施策、これにウイングを広げてきたということでございまして、例えばダイバーシティのまちづくりですとか、平和を希求するまちづくりですとか、こうしたところに仕事の幅を広げてきて、これについても1つのめどが立ってきているのかなというふうに考えております。

その上で、今後、前向きだということを議員からもおっしゃっていただいたんですが、前向きな政策展開として注力したのは何かというふうに問われれば、これはもう人づくりだというふうに私は明確に位置づけております。特に教育、これが私が一番これから取り組むべきテーマだと考えております。全面的に飛驒市として取り組んでまいりました飛驒市学園構想、これも確かな成果を上げておりますし、また、地域と一体となった地域学校協働活動などもかなりの姿が見え、成果を上げていると思います。そして、地域づくり人材を育成する新しい大学C o I Uがこの町に誕生するというのも、それにプラスになるのではないかなと思いますし、午前中、住田議員から御質問いただいた学校作業療法のような特色ある取組も、こうした人づくり、教育という分

野を重視している中で取り組んでることであるわけです。

他方で、コロナ禍を経て社会情勢ってのは劇的に変化をしているというふうに思っております。人口減少という構造的な課題に加えまして、長らく続いたデフレから物価が高騰するインフレ傾向へと世の中の節目が変わったということです。また、本市の人口もいよいよ2万人を切る段階まで来ておるといことです。

そうしますと、もう1つ前向きな政策ということ以外に取り組まなければいけないテーマとして、持続可能な行財政の確立ということは、やはり並行してあるだろうと考えているわけでありまして。次の世代に健全な形で市を引き継ぐためには、痛みを伴う施設の統廃合、あるいは第3セクター等を通じた従来型サービスの縮小、見直し、そうした行財政改革から逃れることはできないというふうに考えておりますし、また、老朽化に伴う維持費が増大する一方、財政規模が縮小していくという中において、身の丈に合った行財政構造へ転換するための、まさしく本番の時期を迎えたと言っても過言ではないのではないかと考えております。こうした厳しい課題ではありますが、正面から取り組んでいきたいと考えているところでございます。

それから2点目、プライマリーバランスについてお尋ねがございました。物価高の昨今において、市民の皆様の切実な御要望があるってことは当然承知をしておりますし、それにできる限り応えていきたいという気持ちは私も全く同じなわけです。これは午前中、籠山議員と議論をさせていただきましたけども、思いは全く私も同じなんです。しかしながら、プライマリーバランスの堅持、健全財政の維持ということにこだわってる最大の理由は、後の世代に過度な負担を残さないということに尽きるわけでありまして。先ほどの10年間の振り返りということにも関連をいたしますけども、この10年間、飛騨市は安易に大きな借金に頼ることなく起債の残高を減らして、それによって毎年の借金の返済に充てる額、公債費を大きく減らしてきたということです。これは借金をしなかったから公債費が減ってきたというわけです。仮にこの10年間、もし目の前の市民要望に応えるんだということで、交付税措置のないような借金をして、どんどんどんどん借金の残高が増えていったとしたら今頃どうなったか。恐らく借金返しの額が非常に大きくなって、あらゆる経費を極限まで切り詰めなければ予算が組めないという状況になっていたというふうに考えられます。地方自治体の借金っていうのは、起債ですね、よく将来世代という言い方をしますけども、これは借り入れた翌年度には返済が始まるんです。通常10年ですから、つまり借りたらすぐ自分のところに跳ね返ってくるということになります。決して、遠い子や孫の世代だけではなくて、すぐに自分たちの世代の首を絞めるというのが借金の現実的な問題であるということです。それゆえに、新たな借金の額と借金を返済していく金額のバランス、つまりプライマリーバランスを保つということが不可欠であると考えまして、これを頑なに守ってきたということです。

今、物価高騰の中で財政状況が非常に厳しい局面にありながらも、様々な政策が実行できているのはこの健全財政を貫いてきたからだというふうに考えております。今後も、市民の皆様の要望にお応えしていくためにも、その基盤となる財政の裏づけは不可欠でありまして、しっかりと引き続き健全財政の維持を目指した取組を進めてまいりたいと考えているところでございます。

それから3点目、数年スパンで債務負担行為、長期継続契約とかを使ってやったらどうだというお話でございます。お触れになりました債務負担行為とか長期継続契約というのは、あくまで

も契約とか予算編成上の手法の一形態でありまして、どのような手法を用いたとしても、事業の実施に必要な事業費の財政負担が生じるということには何ら変わりはないわけでありまして。債務負担行為を設定するにしても、当然ながら、その財源を何で手当するのかということを決めないと債務負担行為は打てないわけでありまして、また、長期継続契約も同じで、一旦契約を結んでしまえば、後年度の財政負担は必ず目に見える形で固定化されるということになりますから、債務負担あるいは長期継続契約をやったからといって、この借金をなくしたり、魔法のように全体額の負担額を減らしたりするものではないということをもまず認識していただく必要があるというふうに思います。

また、単年度の負担が大きいから分割払いにすればいいじゃないかという議論もあるかもしれませんが。個人の家計においてはローンを組んで車を買ったり、家を買ったりします。ですけども、地方自治体においてそもそも資金を調達する通常の起債というのが、これが分割払いということでありまして、借金をするということがイコール分割払いだということなんです。おおむね10年といった期間をかけて、分割して返済していく仕組みになってるわけでありまして。したがって、毎年毎年新たな事業のために借金を返す金額以上の借金をしていけば、その分、翌年度の負担、返済額が雪だるま式に積み重なっていくということです。そうなれば、将来の財政を破綻させるということになりますので、過去の借金返しが終わった分しか借金しないというふうにしなないと、これがどんどん借金が膨らむ原因になる、借金返しが膨らむ原因になるということです。過去の借金返しが終わった分の額しか新たな借金をしないというのが、これがプライマリーバランスということでありまして、これは債務負担行為とか長期継続契約という契約手法の変更によって、根本的に変えられるものではないということになります。

こうして予算編成をするに当たっては、決して単年度の収支だけを見ているのではなくて、市全体の借金の総額と、将来にわたる償還の姿を冷静に見極めながら、全体的な将来負担の設計図の中で行っているということを御理解いただきたいというふうに思います。

それから4点目、予算の規模と職員の負担についてのお尋ねでございます。これは市もどの行政もそうなんです、新たな事業を実施すれば、既存の事業をやめない限り職員の業務負担が増加するというのは、これは事実なわけです。しかし、実際の予算編成では、各部署から市民のための多額の予算要求が上がってまいります。これを査定して落としていくわけでありまして、これは要求してくる段階で、当然職員の負担増を伴うという前提で要求がされてくるわけです。職員は、つまりそれを承知の上で、強い熱意を持って提案してきているということです。

もし御懸念のように負担軽減だけを目的として予算を削るのであれば、そもそも最初からこんな意欲的な予算要求は出てこないということでもありますから、現実的にはそうしたことが全て実現するのが難しいので、財源が十分にありませんから、厳しい査定を通じて削り込んでいるというのが実情なわけです。したがって、今回提出した予算案の規模というのは、職員の業務負担のマックスではなくて、あくまでも市が確保できる財源の限度内のマックスだというふうに御理解いただければよろしいかと思います。

行政の予算編成というのは、入るを量りて出ざるを制すと、このように言います。これはどういう意味かということ、改めて申し上げますと、まず確保できる収入が決まっています、その収入の範囲内で何を優先して予算を立てていくのかというのが行政の予算編成の大原則だということ

言ったものです。民間企業の場合は、高い目標を立てて売上げを追求して上げていけばいいということになりますが、行政の場合は初めから財源は決まっていますから、その決まっている財源の中でどうやってやるかということになるわけですね。したがって、この考え方を取っている限り、本来は財源不足という考え方はないんです。いろいろな自治体が予算編成のときに、来年度は何十億円の財源不足なんて言いますが、入ってくるお金の中で予算を組むしかないわけですから、財源不足という考え方は元来ないんだと、これだけしかお金がないから、これだけしか使えないですよという非常にシンプルなものなんだということでもあります。

それから5点目、マイルドなインフレってのは何だというお話でございます。私が申し上げるマイルドなインフレっていうのは、この物価上昇に伴って人件費や賃金も上がって行って、実質賃金と購買力が維持される緩やかな状態、このようなことを私は指しております。現状まだ実質賃金が物価高に追いついておりませんが、かといって貨幣価値が失われるような急激なインフレではないことは間違いないです。1年前と今の1万円の価値が全然違うなんてことにはなっていない、これがやっぱりマイルドなインフレってことなんだろうと思うんですね。インフレの激しい国に行きますと、1年後ほとんど紙くずになります。なので、1万円札を100枚とか1,000枚積んで日用品を買いに行くなんてことが世界の中ではよく起きますね。そういったことに比べると、そんな状況になってない。ということは、貨幣の価値が失われるほどのインフレではないということでありまして、これはマイルドなインフレだろうというふうに思っております。

今後、ではそうした急激なインフレ、つまり牛乳1本買うのに1万円札を100枚持ってかなければいけないような、そういうインフレが起こったときじゃあどうするのかということになりますが、その頃は市の基金、貯金は目減りしてしまって価値を持たないということになります。逆に借金の額も目減りしてしまって、返済は逆に言うと全部返してしまいます。ですけれども、それをはるかに超えるものの値段、事業費の高騰になりますから、入ってくる税収がそれについてくるかどうかだけが勝負になってくる、こういうことになるわけでもあります。

ただ、今の状況でそういったことになるということはちょっと考えにくいので、まずはマイルドなインフレの中で高騰した事業費をどう確保するのかということが最大の目的でありますので、価値が目減りした基金というようなものが、今後だんだん目減りしていった場合に、財源が手当できないというようなことにならないように、今の物価についていながら事業費を確保することが重要じゃないかというふうに考えておるということでもあります。こうしたことも念頭に置きながら、国の動向とか経済状況を注視して、慎重に行財政運営を行っていきたいということでございます。

それから6点目、飛騨市のアイデンティティーとは何かというお尋ねでございます。アイデンティティーってのは、非常に奥深い言葉でありますし、多様な解釈がありますので、これを一言で表すっていうのは大変難しいというふうに思っておりますが、ただ、この飛騨市のアイデンティティーとは何かっていうことをたまに問われることがありまして、その際に私はいつも3つお答えをしています。1つは豊かな自然、2つ目は脈々と受け継がれてきた伝統文化、3つ目は地域コミュニティの強さ、この3つです。豊かな自然と伝統文化と地域コミュニティの強さ、これが飛騨市のアイデンティティーの基礎であり、揺るぎない基盤だというふうにお話を申し上げます。

実際に、市民の皆さんとこう語っておる中で、やっぱりこの自然豊かな環境に対して自信と誇りを持っておられるという方は本当に多いと思っておりますし、古くから伝わる祭りとか匠の技などの伝統文化、これは市民一人一人の精神的なバックボーンとして深く根づいていると思います。さらに、何と言ってもこの飛騨市には地域住民同士が助け合うというすばらしい風土が残されている。この一体感と温かさこそが、みんながここがいいところだと飛騨市を高く評価される最大のポイントだというふうに考えておまして、市政の運営にあたって常にもこのアイデンティティーを念頭に置いて、地域の誇りを守り育てる施策を展開していきたいというふうに考えております。

最後に7点目、イベントの在り方についてのお尋ねでございます。昨年は市制20周年という大きな節目でございましたので、市内各地で本当に多くのイベントが開催されました。しかし、これは全て市役所が主体となって企画・開催したものばかりではなくて、補助はしておりますけれども、市民の皆様や市内の各種団体が20周年ということで自主的に立ち上げ、開催して下さったものが非常に多かったと認識しております。もちろん市の公式な式典は別として、全体として市民の皆様の自主的な活動が活発であった結果、こういうイベントの数になったというふうに考えておるところでございます。

一方で、元からある地域の行事と新たな地域のイベントの日程が重なったという事案は実際にたくさん見受けられまして、私も事実として感じ、また、受け止めておるところでございます。それどころか市役所の内部で、各部署が企画する行事がバッティングしてしまうということがございまして、私も以前からこれは問題だと言っております、部長会議の場で、とにかく部署間でしっかり事前調整してほしいということを繰り返し強く指示をしております。市役所内のものはそれでもダブったりすることがあるんですが、何とか調整できるようになってきてますけども、民間の皆さんが主催するイベントについては事前に日程の情報がほとんど入って来ないものから、日程が決まった後に共有されて重なってたということがやっぱり多いという実情もございまして、ここの調整について、今、例えば市だけではなくて、伝統行事のことはまず押さえた上で観光協会とか、商工会議所、商工会とかと連携しながら日程の調整をしていく必要があるというふうに考えておりますし、そのように申し上げてるところでございます。

まず徹底したいのは、市長が参加するような行事とか毎年定期的に行われてるようなものって結構大きなものがありますので、年度当初で大体日程の把握が可能です。したがって、それはとにかく早く教えてほしい、早く皆さんに周知してほしいということですし、この確定したスケジュールを関係団体の皆さんに周知して、とにかく後でイベントを企画するときに、これがあるからここはできないよねって外してもらえようとするということが大事だろうということで、そうした努力を今しておるところでございます。先ほどBバイCという言葉もございました。イベントをやる以上、大勢の皆さんに参加していただいて効果も上げたいわけでございますので、市役所だけではなくて市内の各種団体と調整しながら、よりよいイベント開催を模索していきたいということでございます。

〔市長 都竹淳也 着席〕

◎議長（澤史朗）

続いて答弁を求めます。

〔教育長 下出尚弘 登壇〕

□教育長（下出尚弘）

私からは、最後8点目の探Qの今後についてお答えいたします。飛騨市教育委員会、市内の各学校では、令和2年度から6年間、飛騨市学園構想の下、「探究学習」に力を入れて取組を推進してまいりました。一時のものとせず、今後も継続し、さらに進化・発展を目指して取り組むために、これまでの成果・課題を踏まえ、先般、令和8年度からの新たなビジョンをリーフレット「飛騨市学園構想～これまでとこれから～」、このようなリーフレットにまとめさせていただきました。

本構想では、議員がお話しされたとおり自ら問いを立て、深く考えることを重視しております。探究学習等を通じて自らの問いや願いを持つ、仲間と協働する、よりよく課題を解決するの3つの姿・資質能力を身につけ、未来の創り手となる人づくりを目指しております。また、地域の皆さんの御理解、御協力をいただきながら、学校だけでなく家庭・地域、社会総がかりで子供たちの目指す姿・資質能力の育成に取り組む教育を推進してまいります。

具体的に、今後の方向として既に歩みが始まっているところでありますが、児童生徒が自らの興味や関心にに基づき設定した課題に対して、例えば市役所の担当課や専門的な強みを持つ企業などと連携して調べ、解決に向けて活動する、こうした探究学習が地域の課題解決、地域貢献につながり、児童生徒の自信、生きる力につながることを期待しております。また、年々充実を図っている探究学習の取組の過程、成果を広く市民に発表する探求フェスの実施を継続するとともに、今春開学する大学や地元の高校との協働や交流を進め、探究の質を高めていくことを検討していきます。

今後もこのような取組を推進しながら、飛騨市の強みを生かし、多様な人との世代を超えた学び合いを通じて、市内全ての学校の児童生徒が、さらには義務教育終了後も自ら探究し続ける資質能力を飛騨市全体で育てていくことを考えております。

〔教育長 下出尚弘 着席〕

○14番（高原邦子）

教育長の言われたことは本当にそのとおりでと思うし、私自身ずっと生きてきて、子供の頃はそういうことなく、年頃になっていろいろなことを思うようになったんですけど、もっと小さい頃からいろいろなことに対して考える力っていうものがあつたら、もうちょっとまともになっていたかなんて反省したりしているものですから、やっぱり自分に疑問点があつたときとか困ったときも、自分自身に問いを立ててどうしたらいいとか、そういったことを本当に小さいうちは分からないから、みんな共通の探究をして答えを見つけていく、その答えも1つとは限らないし、いろいろあるんですよね。そういったことを知るってことは、すごくこれから先の子供たちにとって物事を考えるっていう、そのことが一番いいんじゃないかなと。偏差値とか何とかで覚えたりするよりも、ずっと将来にわたって物事を考えていくってことは必要なことなので、一番大切なものだなと思ったので今回質問させていただいたんですけど、よろしく教育長のおっしゃられるとおりのことをしていただきたいと思います。

それで市長のほうなんですけど、市長の答えは本当に絵に書いたら教科書ではばっちりの答えなんです。でも何か心に残るのは、先ほども籠山議員が言ってましたけど、市長はおじいさん

のものを将来勝手に使ってしまったらいけないんじゃないかっていう思いがあるし、でも主婦の女の立場とすると、やっぱり今をしっかりとやっていかないといけないって思いなんです。この違いがあるし、私は、市長は豊かな考え方の人だと思うんです。せっぱ詰まった人はそこまでないですよ。だから市長は余裕がある人の考え方だなど。実際、今、男性・女性といういろいろなことになるので言葉はちょっと控えたほうがいいかもしれないけど、女として生きてきた人間と、男として生きてきた人間、やっぱり考え方が違っていると思うんです。女はどうあるべき、男はどうあるべきというような時代から私たちは生きてきてるので。だから市長のおっしゃる、おじいさんのものをせっかく家のために残したお金を使うことはいかがかって言うんだけど、私は今困っているなら使ったほうがいいと思うので、そこは考え方の相違であるし、余裕がある人の考え方だなど。本当に困ってる人ってそんなこと言っていられないので、その辺、市長はどう思われますか。籠山議員との会話の中に入って申し訳ないんですけど、いかがですか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

これは多分男か女かとか、時代とかいう話ではなくて、恐らく生きてこられた時代だと思います。つまり、高度経済成長の時代を若いときに経験された方は、恐らくこの余裕のある考え方にむしろ立つんです。つまり、こう申し上げたらあれですけど、私たちより高原議員はもうちょっと上の世代、籠山議員も多分大体同じで、高度経済成長期を若い頃に経験しておられますよね。我々も経験してる世代ですけども、就職して間もなくバブルがはじけてるので、その後、低成長時代を経験してきてます。そうすると、将来的に経済が伸びてくってという想定をしてないんです。ここで何とか使ってしまったって、後で絶対に経済は伸びていくから果実が入ってくる、収入が上がってくるっていう無意識の理解っていうのが恐らく世代的にあるんですよ。ところが我々よりも下の世代、ちょうど私が境目ですけども、私の1つ下の世代っていうのは経済成長っていうのをほとんど知りませんので、そうすると将来伸びていくという想定ができないんですね。なので、今の状態で守っていかなければいけない。おまけに人口減少がきてるものですから、人口減少っていうことがこれだけ明確になってきてる中になると、ここで何かお金を使ってしまったら、ここで大きな借金をしてしまったら、その後どうなるかももう目に見えてるっていう目に見え方の感じ方、ここの多分違いじゃないかというふうに思います。なので、あまりこの世代論には持っていきたいんですけども、あえて世代論でお答えするとすれば多分そこだろうなというふうに思うので、その蓋然性っていうのは多分言葉にうまくできないんだと思うんです、世代によつての違いってのはですね、でも、恐らくそうではないかというふうに思います。

○14番（高原邦子）

そうですね。あともう1つ、市長の考え方でちょっと疑問に思ったのが、昨日のところでもコンパクトシティとか、地域トリアージ、そういったものを批判的な立場なんですね。私は富山のコンパクトシティ的な考え方が好きだったものから思うんですけど、憲法第25条の生存権を言われて、市長は自分の本当に住みたいところで過ごす、それが理想ですよ。しかしですね、さっき市長は優先的に困ってるところに、財源が厳しいから優先的にとなったら、例えば山の一軒家の外れのところを除雪してくださいよって言ったって、なかなかできないのではないかと

と思うんです。そうすると冬の間だけでも下に降りてきてとか、いろいろなことを考えていくと思うんですよね。だから、財源がないし厳しいんですけど言ってるのに、好きで山の奥とか川のすぐそばとかに住んでる方々が困ったときに、はいつて優先的ではないので、排除されてしまうのに生存権だからなんという、何か言ってることに矛盾を感じてるんです。きれいなことばかり言ってるんじゃないかって思ってしまうんですよ。今荷物のことでも運べないとか、何日にと頼んだりしている状況の中で、なかなか今までどおりの状況ではやっていけないのに、市長は憲法第25条の生存権を基にいろいろ言っていて、今までと同じようにはできないってことははっきり言わない。やっぱり、私はできないってはっきり言ってくれたら正直だなと思うんですけど、そこまでお金もないのにどうしてそう言えるのか、その辺どう思いますか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

それは地方自治体の予算の組み方と関係があって、先ほどの除雪の費用とか、あるいは上下水道の費用っていうのは地方交付税でかなりの措置がされてるんですね。例えば地方交付税っていういろいろな補正率がかかってくるんですけど、飛騨市の下水道って標準的な単価からいくと、たしか100万人分くらいだったかに相当するお金が投じられているんです。それは補正係数を掛けてそうなっているんですね。それは広い地域だから、そのくらいの保障がされてるっていうことなんです。除雪費用も同じなんですね。そうすると、例えば非常に遠く離れたところにある家のサービスを切り落とした場合に、幾ら市が財政的な余裕が出るのかっていうことを考えてみると、実はほとんど仕組み的に出てこない。これは、例えば1軒家を町の中央部に移転してもらうと、100万円助かりますよみたいなことが数字で出てくるのであれば、それはそういう議論が出てくると思うんですけど、現実の予算編成ってのはそうになってないので、そうするとそこに移ってきてもらって幾ら除雪費が減るんですかっていうと、実はほぼ減らないんです。ほぼ同じなんですよ。であれば、そのあたりにこだわる必要はないだろうということになるんですね。

ところが、一般的なコンパクトシティ論っていうのは、もともとヨーロッパとかで出てくるんですけど、もっとコンパクトシティ論の原則って大きくて、50キロメートルとか60キロメートルとかいう範囲の中なものですから、どちらかという富山の町とここみたいな関係性の話なんですよ。ところが日本の中にずっと落としていったときに、今みたいな公共サービスの費用を切り下げられるんじゃないかという漠たる考えの中で、学者の先生たちがそれを論じてスタートしてるのが地方のコンパクトシティ論なんです。でも、実際の予算編成をやるとそうになってないので、それはそこにこだわる必要はないのではないかということで、一応根拠があって、ベースを踏まえた上での生存権の話をしているということになります。

○14番（高原邦子）

それは失礼しました。今人口減少する中でも、成長する強い経済とか今いろいろ言われてるんですね。経済のことをいろいろ見てみたんですよ。経済の話と首長の話と同一にするなって言われるかもしれないんですけど、企業の経営とかいろいろなものに、企業経営者っていうのはコーポレートガバナンス、それは市だってガバナンスをいろいろ決められたりしていると思うんですけど、そういったものをしっかりと分かっている人、市長は100点満点をもらえる、ガバナンスの

ことを分かっていると思うんです。

今言われているのが、経営者たるものアニマル・スピリットっていうものを持ってなければならない。職員とか従業員とか、そういうのじゃないんですよ。なぜかって言ったら、市長の話を聞いておると本当に合理的で、全ての情報を理解して最適行動を取っていらっしゃると思うんですよ。いろいろ見てもちゃんとされているな、職員もみんなそれに基づいてやっているなと思うんですけど、これって経済のところと言う教科書的な経済モデルって言うそうです。でも市長、現実には情報は不完全なことはありませんか。

あと将来不確定、今、イランがあんなふうになって、ガソリンどうなってしまうのとみんな心配したり、将来って不確定じゃないですか。でも、感情やムードっていうのはとっても大事なんですよ。行動に影響が出るんですよ。人間生きているから、生きてる人間は感情で行動する、これを忘れたらいけないと思うんです。

ですから、籠山議員の言っていた市民の声、私も市民の声を聞いてます。もっとこういうことやってもらいたいという声、それがやらしてもらえないとなると、冷めた気持ちになってしまう。だからこそ、首長たるもの市民をがっかりさせるようなこと、プライマリーバランスなんか言わずに見栄を張るっておかしいけど、ちょっとはやってよっていう。

それで聞きたいのが、財政調整基金のことなだけで、今は基金とかに振り分けたけど、基金に振り分けない頃にいろいろな市の議員にすごく飛驒市は持っているねって言われたんですよ。正直よそと比べて持っているほうですか、どうですか。その辺のこともさっき聞かれたと思うんですけど、みんなにすごい持っているって言われてるんです。私はもっと今生きている人のためにも、お金を使ってよ。今職員もフルじゃないから、まだまだ働けるじゃないですか。すごいと思ったのが、市長も御存じの松藤先生が財政局長のときに2,000万円の補正予算を担当が持ってきた。先生はすごくいい計画でいいものだったから、2億円つけてやるからやれって職員に言ったそうです。2,000万円が補正で10倍になったんですよ。そしたら、職員はとてでもないですけど、それほどのものは執行できませんから2,000万円をお願いしますって言ったぐらいで、やっぱり職員の仕事の量というのもやっぱり考えていかないといけないなと思って聞いたら、まだまだ余裕があるというふうで、職員の仕事は余裕があるって捉えてよろしいですか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

多分いっぱい質問が今含まれていたんだと思うんですけど、ちょっと順次申し上げますと、まず職員の余裕って話は、予算要求してくるんだから当然やれるよねって話なんですけど、余裕があるかっていうとそうじゃないですね。やっぱり皆さん無理無理責任を感じて、あるいは自分の積極的な考え方の中で要求しておるといことなので、よくあるんですけど予算査定でゼロ査定にしてみると、実は内心ほっとしてますみたいな話があるんです。そもそも余裕があるわけじゃないものですから、むしろどうやって余裕を持たせるかということでも苦労してるので、そこはそういうことだと思っております。

それとさっき感情やムードの話がありましたけど、僕よく空気って話をするんですね、町の空気。1.1力っていう話をするんですが、ちょっとポジティブっていう、少し前向きになるとそれが

2万人の町だと2万乗になって、ものすごく力が出るんだって話をよくするんですけど、ポジティブな気持ちはどうやって生み出されるかって話になると、これは財政出動だけじゃないんですね。お金を使うことだけがポジティブな空気を生み出すのではないんです。それを私はそれこそこの10年間で、すごく分かってやってきたつもりです。じゃあどういふときに元気が出るかっていうと、飛騨市が注目されたとき、飛騨市がほかの町の人たちにいいなって言ってもらったとき、あるいはメディアなんかでも取り上げられてニュースで流れたりとか、そういうときです。しかもいいニュースとか、活発なニュースで。そういうときってというのは、必ず町の人たちは何か元気になったような気がするとか、よその人たちが飛騨市って元気だよねって言ってます。では、その人たちが市から何かの給付をもらったかっていうと何にも変わってない。ましてや、よその人たちが飛騨市から何かしてもらったかという、そんなことはしてない。ですけど、町の空気ってのはそういうことによって変わっていくんだっていう話を、私いろいろところで申し上げています。ですから、財政出動がなくてもポジティブな感情・ムードはつくれるし、そのために今までやってきましたし、現実にもそういうことがプラスになっておるといふふうに思っております。

○14番（高原邦子）

先ほどアイデンティティーの飛騨市のことで、市長は3番目に地域コミュニティの強さって言われたんですけど、これってちょっと私疑問に残ります。古川町は結構強いかもしれませんが、神岡町は今本当にいろいろな地域でコミュニティが取れなくなっている。人口が減ったということもあるんですけど、空き家も多くなったりとか、昔から頑張ってくれた方々がみんな亡くなってしまったりして、だからこの地域コミュニティの強さっていうものは、やっぱりアイデンティティーというならば、これをちゃんと維持していくためには何か施策をしていかないといけないし、これはとってもしっかりとしたことなので何かいい知恵を出してやってもらいたいなと思うんですけど、何か知恵はありますか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

地域コミュニティが弱っていることは間違いないんです。今まで支えあってきたものが支え切れなくなっているという事実もあります。なので、そこをまさしくお尋ねいただいたように、市としてどうやって補っていくのかってことを綿々とやってきてるわけですが、今回の令和8年度予算で言えば、郵便局の局長と連携して集落支援員になっていただいて、飛騨市の見守り支援がやっている部分の仕事を一部肩代わりしていただくってことなんかは、見守り支援をやる人自体も少なくなってきたので、そこをユニバーサルサービスで必ず残っていく郵便局と連携することでそれを維持していこうということになります。コミュニティはコミュニティの強さだけがアイデンティティーじゃなくて、コミュニティの強さによってそれぞれがもたらされているもの。つまり安心感であったり、誰かに支えられているという気持ちであったり、それがアイデンティティーなので、地域コミュニティ、区とか、地域の組織が弱っていったとしたら、それを代替するものを持続可能な形で作っていくというのが行政の仕事なので、それを今回の予算の中でも幾つかそういう形で、今申し上げたのは代表的な例ですけど、ほかにもございますし、

そうやって出させていただいているということです。

○14番（高原邦子）

本当にまだ納得がいけないのが、財政調整基金も後々のやつで大変だから大変だからってずっと昨日も今日も言われておるんですけれど、やっぱり貯金っていうか、ため込むのが行政ではないと思うし、むしろマイナスになるくらい市民のためにお金を使っていたらいいと思うんですね。なぜそう思うのかって言ったら、やっぱり本当に世の中は困ってる人がいっぱいいて、公が助けてくれなければどうしようもない人って本当にいるんですね。人間生きていく上で、一番は本当に自助ですよ。でも、どうしようもない人もいっぱいいて、相談もできない人がいるんですね。そういったところに光を当てていくっていうのに、予算がないから何もしないっていうのは、私は地方公共団体の役割ではないなと思うのでぜひやってもらいたいと思うし、そんなにもためたければ、義務的経費ではお金がかかりますけど、何にも仕事しなければお金はたまりますよ。だから、1年間ぐらい何もなくてちょっとため込むとか、そしてすごいことをやるとかっていうこともあるし、だから私はあまりプライマリーバランス、プライマリーバランスでちゃんとやっていますから健全ですっていうよりも、いっぱいやらなければいけないところをさっさと片付けていくほうが、これから私はインフレになると思うんで、貨幣価値も下がってくると思うし、今まで例えば道路の舗装だったら20メートル舗装できたものが、10メートルぐらいになっているんじゃないかなと思うんだけど、横山基盤整備部長、この辺、工事費は上がっていますかね。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□基盤整備部長（横山裕和）

工事費と言いますか、除雪費のときによく言うんですけれども、除雪費だけでもここ10年で1.6倍、1.7倍という額になってますし、工事費につきましても、毎年人件費が5%近く上がっているのが続いておりますので、極端な話、10年前の額ですと1.3倍、1.4倍、諸経費も含めると2倍になっておる工種もありますので、非常に上がっておると思います。

○14番（高原邦子）

あと市長はAIを使っていろいろ答弁も考えられたとあってSNSに出ていたんですけど、市長はAIが人間の能力を超える、知能を超えるっていうのを今いろいろ言われて、それが何年よ何年よって言われてるんですけど、それを信じていますかね。そして私は古い人間なのであれですけど、シンギュラリティーっていうらしいんですけど、今プレシンギュラリティーっていう、技術的特異点っていう人間の知能を上回ったところがもう迫ってるという学説もあるんですけど、だんだんこういう意見のやつもAIに書いてもらったり答えてもらったりして、私たち議員の中でそういうことに強い人はAIに作ってもらった質問をすとか、何か味気ない世の中になるような気がするんですけど、これはAIを知らない人間のたわ言なんではいしょうか、どう思われますか。最後にお伺いします。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

AIの進化がすさまじいものですから、でもまだアシスタントだと私は思っております。実は、

先ほど答弁でさせていただいたやつは結構な字数があったと思うんです。多分7,000字ぐらいあったと思います。あれは今まで自分で書いていたんですけど、市長答弁の、特に高原議員のやつは大抵私が自分で書くんですが、今回どうしたかっていうと、うちの秘書室の職員に発言通告いただいたやつ読んでもらって、その場で私がしゃべってたやつを録音して、録音したやつをそのままAIに起こさせるとあつという間に文字起こししますので、それを答弁の形に直してって書いたら30分で終わりました。多分、5～6時間の時間の節約になったと思います。でも、何て答えるかを書けって言ったら、多分全く違うものが出てきたと思います。それはやっぱり、自分が考えたことを言うってことのアシスタントとして使っているわけです。定型的なものは多分答えると思います。恐らく部長答弁のレベルであれば事実を尋ねているものですから、恐らく1年か2年の間には全部書けるようになると思いますが、私が答えるような市の方針であるとか、今あったような例えばコンパクトシティとかインフレに対する物の考え方、アイデンティティーをどう考えるんだみたいな話はうまく答えられないです。答えても、それが的確かどうかというのは分からない。ただ、アドバイスをしてくれるってことはありますから、今までうーんって書いていた分は圧倒的に時間が短くなるということはあると思うんですが、何を語るのかってことは自分で考えるということが基本なので、そこはAIの時代になっても揺るがないと思うし、アドバイスをしてくれるって意味では、相談相手になってもらえるということではいいアシスタントなんですが、でも最後決めてどうするのかってのは自分ですから、そこは今後AIの時代が進んでいっても変わらないだろうなというふうに思っております。

○14番（高原邦子）

今回はいろいろなことを言いました。おばさん感覚のものであったこともあると思いますが、ぜひ市長には経済学のほうで言われるアニマル・スピリットっていうものをちょっとだけ取り入れてくれたらなと思っております。

これで私の質問は終わります。ありがとうございました。

〔14番 高原邦子 着席〕